

河内将芳著

『日蓮宗と戦国京都』

淡交社 二〇一三・七刊
四六 二七九頁 一八〇〇円

本書は中世京都における日蓮宗の普及の実態を活写することで、日蓮宗の特質と戦国期の京都という二つの歴史的個性を炙り出すことに成功している著作である。まず鎌倉期の日像による京都布教の様相から始めて、四条門流である妙顕寺の発展と、それを支えた莫大な富を有する柳酒屋に代表される京都の有徳人たちが描かれ、さらに寛正六年（一四六五）・文明元年（一四六九）を大きな画期としてさらに飛躍をみせること、京都の貴族層にもその教線が及ぶこと、そして一六世紀には本国寺日了の僧正任官など、日蓮宗僧が身分上昇を果たすことが指摘され、この時期までに京都が「おおかた題目の巷」と化したことが指摘される。

その上で「衆会の衆」と呼ばれた日蓮宗の檀徒集団が検断権を握るにいたり、その延長線上に天文法華の乱が展開されること、六角氏などの諸大名の介入によりその運動は挫折するものの、その後迅速に復興をみせ、日蓮宗寺院連合が永祿年間には自立性の強い「会合」を成立させ、諸権力と政治的折衝を行うに足る政治性を保持する様相を、近年新たに発見された「十六本山会合用書類」により描いてみせる。

さて、本書は一般読者に向けて書かれていながら、丁寧な実証

性を兼ね備えていることを特徴とする。それは著者が京都の史料ならびに日蓮宗関係の諸史料に精通していることにより実現したものであり、京都の日蓮宗史において信用に足る安定した通史を得たことの意義は大きい。この点を指摘して、さらに特質としてつぎの二点をあげることができると思う。一つは京都の日蓮宗史が、つねに顕密仏教の牙城たる比叡山延暦寺との関係において描かれていることである。とくに延暦寺から如何に身分的な上昇が図られてゆくか、に意が注がれており、それが具体的に明らかにされているのである。これは、著者がこの著作に込めた一つの大きな主張である。「戦国仏教論」に関わる点である。すなわち最近議論が再燃した「戦国仏教論」に関わって、その最大の根拠をことうした社会的地位の上昇に求めているからである。ここに著者の独自の見解がある。さらに二点目の特質として、本能寺・妙覚寺との関連を通して織田信長・豊臣秀吉権力との関連が解明されている点である。単なる寄宿先という以上に日蓮宗寺院の実力が彼ら権力者との関連を密接にしたことが具体的に述べられている点、興味深い。

さて、最後に評者の著作『戦国仏教』（中公新書）へのご批判に閑説して紹介を終えよう。著者の論点は誠的に射ており十分納得できるものである。著者の指摘にあるように身分的上昇についての認識は確かに評者には欠けていた論点であった。ただ、その上で問題となるのは、京都以外の地域での実態と、そして京都日蓮宗と地域との関連であろう。中央での社会的地位の上昇は、地域でもあったのか、また地域へ波及したのか、という点である。

さらに一步すすめば、身分的上昇からは推し量れない地域における寺院固有の展開を評価する必要もあるのではないかと思われる。今後は非著者にはこの点も明らかにしていただきたく思うことを述べてつたない紹介を閉じよう。

(湯浅治久)